

拘禁されたエストニア大統領

—コンスタンティン・パッツの記録 1940-1956 年—

大 中 真

キーワード：国際関係史、第二次世界大戦、独ソ戦、バルト諸国併合、
エストニア、強制収容所

はじめに

コンスタンティン・パッツ（Konstantin Päts, 1874-1956）は、エストニア共和国が1918年2月24日に独立宣言をした際の臨時政府首相であり、独立後はエストニアの国家元首であるリーキヴァネム（Riigivanem, 国家元老）を数度に亘り務めた。そして1934年以降は権威主義体制を確立、1938年に憲法改正して初代エストニア大統領となった人物である¹。同時代のフィンランドのマンネルヘイムや、ポーランドのピウスツキのような、圧倒的存在感を持った祖国の英雄として見なされていた訳ではないが、戦間期エストニアにとって第一級の最重要人物であることは間違いない²。

しかし、1939年9月の独ソ不可侵条約付属秘密議定書によりバルト諸国のソ連邦併合が密約され、1940年6月にソ連邦政府から最後通牒を突きつけられた後にエストニア国家が解体してゆく過程で、彼はソヴィエトのNKVD（内務人民委員部）に拘禁され、そのまま行方知れずとなり、公的な歴史の表舞台から姿を消した。戦後は彼の生死さえ不明の状態が続き、1980年代に入っても、いつ、どこで死亡したのか、埋葬先さえ明らかでなかった。パッツの名が人々の記憶に甦り、また公然と語ることが可能となったのは、ペレストロイカとソ連邦解体、そして何より冷戦終結後のエストニア国家の独立回復（1991年9月）を待たねばならなかった。

ソ連邦占領下のエストニアでは、戦間期に活躍した各分野の指導的人物は徹底的に殺害されるか弾圧された。これはラトヴィア、リトアニアなどバルト諸国に共通の事態であった。例えばエストニアでは、パッツ大統領の他、ヨハン・ライドネル（Johan Laidoner）総司令官や、最後の内閣の閣僚11名のうち10名がソヴィエト側に逮捕され国外追放（つまりソ連邦内の別の共和国へと）された。ただ一人、ユーリ・ウルオツ（Jüri Uluots）首相のみ地下に潜伏しスウェーデンへの脱出に成功したが、彼も1945年にその地で死亡した。また最後のエストニア議会議員のうち、68名が逮捕され、西側自由世界に脱出できたのは28名だけであった。逮捕が意味するところは、ロシア国内の強制収容所収監であり、彼らのほとんどは生きて再び祖国の土を踏むことはなかった。さらに、戦間期に国

家元首を務めた10名のうち9名が逮捕拘束され、この全員は1941-1942年にかけてソヴィエト当局により射殺、死刑または収容所で病死や自殺の運命をたどった。元リーキヴァネムのアウグスト・レイ (August Rei) のみがスウェーデンへの脱出に成功し、彼は死去する1963年まで、大統領代行首相の法的地位で亡命活動を続けた³。

以上は氷山の一角に過ぎない。エストニアでは独立回復直後の1992年、議会が「抑圧政策調査のためのエストニア国家委員会 (ESCEPR: Estonian State Commission on Examination of the Policies of Repression)」を設立し、活動を開始した。12年間の歳月をかけ、同委員会は2005年に報告書を公刊している⁴。本稿ではその具体的内容や詳細には触れないが、1940-1991年の全占領期間中に総計9万人のエストニア市民が殺され、それに加えてほぼ同数9万人の市民が祖国を離れたまま二度と帰還しなかったと見積もられている。また、第二次大戦中に焦点を当てると、1939年10月時点と比べた1945年末のバルト諸国人口損失は、エストニアで25%減、ラトヴィアで30%減、リトアニアで15%減という数字もある⁵。こうした事実を踏まえた上で、パッツの記録を読み進めたい。

1. 資料紹介

アメリカのスタンフォード大学フーヴァー研究所公文書室には、多数のバルト諸国関連資料が収められている⁶。特に、戦間期の政治家等に関する貴重なものが多く存在し、その中の一つがコンスタンティン・パッツ関連文書である⁷。本稿で紹介するのは、そのボックス資料の一つ、『コンスタンティン・パッツ——祖国を遠く離れた歲月』である (英語訳は Konstantin Päts: Years far from home. エストニア語原題は Eluaastad kodumaalt eemal.)。もとはエストニアの新聞『オフトゥレフト』(Ohtuleht) 紙に、1991年12月18日から1992年1月10日にかけて、計14回に分けて連載された記事であり、元エストニアKGB (国家保安委員会) 代表代行の地位にあったウラジミール・ポール (Vladimir Pool) が執筆者である⁸。

ポールはその立場を利用して、パッツに関する記録を調査し執筆したとされ、このエストニア語新聞記事から、エーロ・ヴィフマン (Eero Vihman) が全文を英語に翻訳したものが同ボックスに存在する。本稿では、この英語版を解説する。翻訳の経緯や翻訳者について、フーヴァー研究所の公文書室に直接照会したが、すでに数十年の歳月が経っており、詳細は不明であった。しかし、英語翻訳版はタイプ打ちされた原本のままであり、フーヴァー研究所内において行われたことが窺われ、世界でここだけが保管する貴重な版である。以上の理由から、英語翻訳版を用いるという問題点はあるものの、この文書を紹介することには学術的意義があるものと筆者は考える。その内容は、ソヴィエト当局による1940年から1956年にかけてのパッツ一家の監視記録、密告情報、手紙の開封、NKVD各機関における通信報告と指令などからなっている。

同文書 (以下、『パッツ記録』と略) の概要は、次の通りである。

1. ウファへの到着 1940年8月
2. エストニアへの手紙 1940年8月
3. ヴィクトル・パッツからレオ・パッツへ 1940年9月
4. コンスタンティン・パッツからクドリャコフへ 1940年10月
5. NKVD 諜報員から 1940-1941年
6. メルクーロフからソロコフへ 1941年3月
7. ソコロフからフォードトフへ 1941年5月
8. 投獄 1941年6月
9. ヘン・パッツ 1941年7月
10. ドイツ諜報 1937年
11. スピードボート 1940年6月
12. ユルチャックから 1942年3月
13. モスクワのコンスタンティン・パッツ 1942年8月
14. ブトルカでのヴィクトル・パッツの死 1952年3月、ブラシェヴォでのコンスタンティン・パッツの死 1955年

以上が英訳 A4 版で合計 94 枚にのぼる資料である。さらに、1992 年 2 月 13 日に『エースティ・エル』(*Eesti Elu*) 誌に掲載された、コンスタンティン・パッツの孫で、祖父と共に拘禁されたマティ・パッツ (Matti Päts) とのインタビュー記事が、やはりヴィフマンの英語訳によって 18 枚添付されている。従って、『パッツ記録』は合計 107 枚からなっている。かなりの長文であり、全訳は紙幅の関係で不可能なため、内容を要約しつつ紹介してゆきたい。

2. ソ連邦によるエストニア併合とパッツの拘束

現在のエストニア政府の公式見解では、大統領としてのパッツの任期は 1940 年 6 月 17 日で途切れている。これは、1940 年 6 月 16 日午後 3 時 20 分に、8 時間以内の回答を要求する最後通牒がソ連邦政府からエストニア政府へと発せられ、エストニアがこれを受け入れたことに由来すると思われる。実際、パッツはその後しばらくは大統領であり続けたが、もはや実権はなく、6 月 17 日をもって独立主権国家としてのエストニアは消滅した。19 日にはジダーノフがソヴィエト政府特別委員として首都タリンに降り立ち、ソヴィエト側が一方的に用意した組閣名簿に従い、ヴァレスを首相とする親ソ派の「新政府」の承認を、パッツに強要した。7 月 14-15 日には、大規模かつ組織的な不正選挙による議会選挙が強行され、招集された「新議会」はソ連邦への「編入」を決議した⁹。当時大統領官邸となっていたカドリオルク宮殿内で囚われ人となっていたパッツ大統領は、ついに 7 月 30 日、NKVD により逮捕拘束された¹⁰。『パッツ記録』は、この後から始まる¹¹。

1940年8月9日、ロシアのウファ駅に第16急行列車が午前10時45分、予定通りに到着した。4人の成人と2人の子供が一行であったが、これこそパッツ一家であった。すなわちコンスタンティン・パッツ大統領、息子のヴィクトル・パッツ (Viktor Päts)、その妻ヘルギ・パッツ (Helgi Päts)、家政婦のオルガ・トゥンデル (Olga Tünder)、ヴィクトルとヘルギの子供である兄マティと弟ヘン (Henn) の6名である。一行に付き従っていたのは、ソ連邦NKVDのヤコブレフ (Yakovlev) 中尉だった。ヤコブレフは部局長のコルニエンコ (Korniyenko) へ、コルニエンコは部局長代理のウロジミルスキー (Vlodzimirski) 少佐へと、報告を送っていた。ウロジミルスキーは、バルト諸国から追放されてきた政治家、政府関係者、軍人を「処理する」専門家であった。

彼らには暗号名がつけられ、パッツは「老人」、ヴィクトルは「ボクサー」、ヘルギは「ニードル」、オルガは「ヤーガ」、マティは「大きい方」、ヘンは「小さい方」として逐次報告されていた。この日以降、彼らにはバシキール ASSR (自治ソヴィエト社会主義共和国) NKVD による24時間監視体制下での生活が始まった。バシキール自治共和国内務人民委員のソコロフ (Sokolov) 大尉へは、パッツとその家族が逃亡しないように、また外部と連絡できないように24時間秘密監視を行うよう、ソ連邦内務人民委員のベリヤ (Beria) から直接指示が出ていた。パッツ一家には、ウファのレーニン通り46番地にあるバシキール人作家タギーロフ (Tagirov) のアパートメントが与えられ、彼らはそこで1年近くを過ごすことになる。

新居に落ち着いたパッツ一家は、すぐにエストニア本国の親族と連絡を取ろうとした。8月14日の日付で、ヴィクトルはタリンに残った兄のレオ・パッツ (Leo Päts) に手紙を書き、新住所を知らせ、コニャック、ウィスキーやワイン、チョコレート、ニシンなど魚の缶詰を送って欲しいと頼んでいる。ヘルギもタリンの姉妹へ、オルガもタリンの母親へ、それぞれ手紙を送っているが、その内容は、まだ楽観的である。これら3通の手紙は、しかし、決してエストニア・ソヴィエト共和国に届くことはなかった。ヘルギとオルガが夜9時過ぎに足早に郵便局へ行き投函したことも、全て分刻みで逐一監視報告されていたからである。3通の手紙は、投函後すぐに取り分けられ、NKVDでロシア語に翻訳されて精査された。秘密の通信が封筒内に書かれていないか、犯罪に結びつくようなものがないか、徹底的に検証され、何もないと分かった後も、差し止められたままであった。ウロジミルスキーは直ちに、エストニア内務人民委員代理のシュクーリン (Shkurin) 大尉に指令を出し、手紙の宛先の3名を徹底的に調べるよう命令したが (因みにレオ・パッツは地下に潜り、ヘルシンキへの脱出に成功していた)、エストニアNKVDにさえ、パッツ一家の居所は教えなかった。こうして、エストニアでも誰一人として、パッツ一家の行方を知る者はなかった。

一方で、パッツ一家にも、エストニアがどのような状態になっているのか、何一つ分からなかった。報告は日々単調になっていき、時々息子と共にNKVDへ出頭する以外は、「老人」はほとんど家に引きこもったままであった。バシキール自治共和国内務人民委員

代理のクドリャコフ（Kudryakov）やモスクワから派遣されたソ連邦 NKVD 代表は、夜遅く頻繁にパッツのアパートメントを訪れ、「老人」と「ボクサー」と、話し込むことが多かった。ヘルギやオルガの散歩や買い物も、歩いた通り名や購入した物まで、分刻みで監視報告されていた。8月終わりになると、慣れない気候もあって孫のヘンが病気となり、コンスタンティン自身も通風、糖尿、胃痛のため、ほぼ毎日医者が往診にやってくるようになった。

パッツ一家の生活は、徐々に苦しくなってくる。9月9日付け「諜報部筋からの報告」では、ヘンの病気が重くなり、オルガの発言「もしスターリンと彼の子供がエストニアに連れて来られたら、ここでパッツの子供たちが受けるよりもっとよい看護が受けられるのに」とか、「医者は行き来するが何も変わらない。明らかに私たちのことを治療しながらない。いっそ我々を射殺した方がましだ」といった、苛立ちを隠せない様子が窺える。また9月30日付け監視報告によると、レーニンと革命通り角38番のパン屋に行ったオルガが、外の行列に並び、自分の順番になったところで突然入店を禁じられた。彼女は「エストニア大統領のためにパンを買いにきた」と説明して書類を見せたが、結局入店すら認められず、パンなしで夜8時に帰宅したことが記録されている。

コンスタンティンは9月2日、バシキール自治共和国人民委員部に宛てて嘆願書を提出した。孫の病気が深刻なこと、孫を連れて母親と家政婦オルガを外国へ、スイスか北イタリアに出国させて欲しい、特に息子の嫁はいかなる政治活動にも携わったことがない、是非助力をお願いしたい、と切々と文面で訴えている。しかし、返事は何もなかった。彼は再度、10月31日付けで「同志 Y. N. クドリャコフへ」と題する嘆願書を書き、冬の到来を前に下の孫が極度に弱っていること、気候と特に食事不足が病状の原因とする医師の診断を述べ、エストニアへ戻すかどこか外国の中立国へ出させて欲しいと訴えた。クドリャコフは、嘆願書を受け取ったものの何も処置を取らず、パッツに逆提案をした。それは、大統領がエストニア領土における反ソヴィエト活動について知っていることを全て書き出してくれるならば、引き換えに子供たちの問題解決に手助けする、というものだった。パッツはこれを拒否した。

ソコロフからソ連邦内務人民委員代理のメルクーロフ（Merkulov）に11月5日に送った報告には、パッツ一家が中央貸し出し図書館を頻繁に訪れていること、コンスタンティンとヴィクトルの父子は人生を引退した生活を送り、友人を誰も作っていないこと、彼らは月に2,000ルーブリをNKVDから受け取っているがそれでは不十分だとコンスタンティンが不平を漏らしていること、一家の隣家に24時間秘密監視の歩哨所を設け、さらに裏庭からの階段出口を監視する別の歩哨所を構築中であること、庭には明かりをつけ有刺鉄線を張り巡らしたことなど、生活の細部隅々までの報告がなされている。

しかし、このような状況下でも、パッツは人生を諦めたわけではなかった。11月19日、彼は「同志クドリャコフ」に上申書を提出した。ラーコシ（Rakosi）がハンガリーで獄中から釈放されたとの新聞報道に接し、ハンガリーとの間で人物交換がある場合には自分と

家族が適任だと申し出たのである。パッツは、かつてハンガリーから送られた勲章の名称を列挙し、イタリアやドイツとも、交換に応じられると述べている。この上申書は無視されたが、彼はその後もクドリャコフに、ドイツ人戦争捕虜との交換に自分たちを使うように訴えている。監視体制の中、一家はささやかなクリスマスを迎え(12月23日、ヴィクトルとヘルギの夫婦は買い物に外出し、400グラムのクッキーと200グラムのチーズ、それにクリスマスツリーの装飾品を買ったことが記録されている)、1941年に入った。

1941年1月28日付けの諜報員からの報告には、コンスタンティン・パッツの肉声が記録されている。彼は、どちらにせよすぐ祖国に帰還できると考え、孫たちをソヴィエトの学校に行かせようとしなかった。また、自分のことをデカブリストや作家コロレンコ(Korolenko)と比較していたようであり、自分や子供たちが一体何の罪で罰せられているのか、どうしても理解できないと語っていた。荷造りするための時間が3時間しか許されなかったため、暖かい衣服など必需品が持ち出せなかったことも不満に思っていた。そして、自分の過去を振り返り、こう語る。

「私は革命運動をしたためにツァーの下で多くの苦難を経験し、ドイツ占領下¹²でも同じだった。自由で独立したエストニアのために戦い続けたことで、銃殺隊から死刑を宣告され、強制収容所に入れられ、亡命のうちに人生を送ってきた」

「ソヴィエト軍が1939年にエストニアに入ってきた時、私はそれに同意した。なぜなら、それが権力政治だと悟ったからだ。彼らソヴィエトは強いが、我々エストニアは弱く、小国だ。その1年後、私は条約¹³に従おうとしなかった、条約違反を試みた、と言われた。私は再度屈服した。そしてこう思った、もし新しい時代が来ているのなら、新しい人々に国家を率いてもらおうと。私は新政府を組織し、自分は身を引いた。というのも、自分の人生は完了したと思ったからだ。いまだに新聞では、選挙によってエストニア人民の完全な満場一致が証明された¹⁴、と書かれている。他に何を望むのか？ 私の国では万事全てが平穏であることが予め決まっているのだ」

どのようにして、ここまで率直なパッツの言葉をNKVDは入手できたのか、家事手伝いとしてパッツ一家に新たに雇われた女性を通じてだったのか、あるいは何らかの方法によったのかは分からない。しかし、今や拘禁されたエストニア大統領の言葉として、生々しさは伝わってくる。パッツ一家は、なおもエストニアに手紙を送り続けていたが、NKVDはそれを押収し、分析をしていた。だがヘルギが知り合いに送った手紙が奇跡的に母親に届き、若干の手紙のやり取りがなされたことが記録されている。ここから彼らは、エストニアの情勢が非常に厳しくなっていることを知る。一家の隣人は、文字通り壁に聞き耳を立て、窓ガラスを通してパッツ一家の私生活を詳細に監視し、NKVDに報告していた。

1941年春になっても、パッツからはエストニアの反ソヴィエト活動について、何ら有益な情報を得られなかった。同時期にペンザに拘禁されていたライドネルからも、やはり情報を入手できなかったようであり、NKVD上層部は苛立ちを隠せないでいた。進展が

ないことで、メルクーロフはソコロフに対して、「パッツと個人的な接触を持ち」、「強制的ではない、打ち解けた雰囲気の中で」会話することで情報を集めるよう指示していた。

これを受けて4月4日にソコロフからモスクワのNKGB 第二部長フェドートフ (Fedotov) への報告書では、「パッツ一家の振る舞いは極端に用心深く」、特に「パッツ父子はソヴィエト権力に対して敵意を抱いており、反革命的民族主義者の見解を表明し、エストニアのブルジョワ体制を賞賛、ソヴィエトの現実を陰気な光で表現し、スターリン憲法をけなそうとしている」。またコンスタンティンはコルホーズに批判的で、エストニアでは不可能だと語っていた。ソコロフは、彼らの決して打ち解けない生活様式や非常な警戒心の強さから、パッツ父子と取引するのは難しいと考え、ヴィクトルを森林警備・森林再生部門の経済専門家として、またコンスタンティンを都市地方自治体経済部門の園芸相談役として、働かせることを提案した。それによって、二人を操縦しようとしたようである。

続いて、5月8日付けで同じくフェドートフに送った文書では、パッツ一家全員が反ソヴィエトの発言をしたと報告された。パッツは「新しいソヴィエト共和国（彼はにやにや笑いながら言及した）は、まだ西欧のどの国によっても承認されていない。それゆえ、彼らの運命はまだ決していない。だからドイツとフィンランドの反ソヴィエト活動は『我々』にとって非常に有益である」。ヴィクトルは反ユダヤ主義を公言し、特に反ソヴィエト的であること、彼の妻ヘルギも、この地ほど労働者が惨めな状態であることは見たことがないと言った、などである。また、パッツ一家を訪れたり、彼らと街中で会話をした数名も調査対象となっていることも報告された。パッツ父子は、提案のように働きたがらなかった。

5月31日付けでソコロフからモスクワの国家保安人民委員代理コブロフ (Kobulov) に宛てた報告書には、さらに辛辣を極めるパッツ一家の発言が残されている。コンスタンティンの発言を拾ってみよう。「共産主義とは何だ？ 全てが嘘だ。共産主義とは惨め、貧困、退屈、あらゆる物の欠乏だ」。ソ連邦の政策は臆病であり、「自国の弱さを認識し、攻撃を恐れているが、相手がフィンランドやエストニアのように自分より弱い場合には、秘密裏に攻撃の準備をしている」。

この中で興味深いのは、彼の国際政治に対する洞察である。ソヴィエト側に拘禁されて既に10カ月、外部と遮断され情報もほとんど入手できなかったが、第二次世界大戦の行方を冷静に分析していた。パッツによれば、「イギリスは征服され、次にドイツはソ連邦に攻撃を仕掛けるだろう」。一家の希望はここにかかっている。1942年には、自由なエストニアに再び戻れるか、どこか共産主義でない西欧の国へ行きたい。彼は言う。「ソヴィエトーフィンランド戦争の前、イギリス外交官は活発に、エストニアをソ連邦と戦わせようとした。しかし私はこれに同意しなかった。イギリスは必要なときに援助を送らないことを知っていたからだ。何しろイギリスは海を越えてあまりに遠すぎる」。

母国の将来については、エストニア人は自ら奴隷になるようなことはせず、また共産主

義の調べにのせて踊ることもせず、自らの自由を擁護するだろう。「あらゆる軛は、反対勢力を呼び起こす。・・・ソ連邦はこのことを理解できない。ソヴィエト権力が人々を抑圧すればするほど、彼らは沈黙する。この地の人々はあまりに抑圧されているので、一種のプラスチック製大衆へと変容している」。コンスタンティンの「反革命の見解」はパッツ一家4人全員が共有している、と報告の中では明記されている。

6月18日も、いつものような単調な監視報告が作成され、20日金曜日にタイプされた。19-21日分の報告は翌月曜日にタイプされるはずだったが、日曜日に戦争が始まった。1941年6月22日、独ソ戦の勃発である。

3. 独ソ戦開始と一家の拘禁

ウファでの10カ月半は、パッツ一家にとってはまだ幸運だったと言えるかもしれない。冒頭で述べたように、ほとんどのエストニア政治指導者は、既に残酷に殺害されていたからである。祖国から強制的に拉致されて来たとはいえ、そして反革命分子である証拠を何とか探そうと執拗な監視下に置かれていたとはいえ、彼らには住居が与えられ、生活費が支給され、買い物など外出も許されていた。現職の国家元首であったことが、ソ連当局にコンスタンティン・パッツを安易に殺害することを、躊躇わせていたのかもしれない。

しかし、独ソ戦が世界の歴史を、多くの人々の人生を大きく変えたように、パッツ一家の運命も劇的に変えてしまった。パッツ大統領と息子ヴィクトルは、1941年6月26日に逮捕された。二人は、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国刑法典第58条第4項と同第10項により告発された。これは、ソヴィエト体制の転覆と反革命的破壊活動において国際ブルジョワジーを支援した、というものであった。そして逮捕令状には、以下のような罪状が記載されていた。

- 「1. 独立国エストニアを創作する目的で、非合法の救国委員会を組織し、自分自身をその議長に任命した。後には政府指導者として、ソヴィエト権力に対する戦いを組織した。
- 「2. パッツについて1920年代以後の一連の文書を調査した結果、処刑されたボリシェヴィキの写真が発見された。だが彼はこれとの関係を否認している。
- 「3. 彼はファシスト・ドイツと一緒に、反ソヴィエト政策を調整した。1939年8月には、フィンランドに行く途中エストニアに立ち寄ったドイツ軍参謀総長ハルダー將軍を接待した。

ポールによれば、ある文書に逮捕が6月24日と書かれてあるが、全てのバルト諸国の指導者は6月26日に逮捕されているので、この日付で間違いはないという¹⁵。逮捕はNKGB（国家保安人民委員部）の指令で行われ、「疑いもなく、最も高い政治レベルの決定により」実行された。大統領はバシキール自治共和国NKGBの秘密刑務所独房26番へ、ヴィクトルは同じ刑務所の別の独房、ヴィクトルの妻と家政婦もそれぞれ別の独房へと入獄した。翌27日には、NKGB課報員が、孫二人をウファの未就学児孤児院第1番へ連れ

て行った。

NKVDの尋問は非常に残忍で厳しいものだったが、彼らは独房の中までも監視と密告の網を張り巡らせていた。コンスタンティンには二人の情報提供者が近づいたが、そのうちの一人であるドイツ人、暗号名「ガード」は大統領の同情を引くことに成功した。「ガード」は、自分はパスポートにドイツ人だと記されていただけの理由で、独ソ戦開始後に逮捕された無実の犠牲者だと演じたのである。「ガード」により、独房内でのコンスタンティンの会話は全て当局に詳しく報告されることとなった。しかしそのお陰で、我々読者はパッツ大統領の獄中での肉声を知ることができる。

彼は、戦争の行方に大きな関心を抱いていたようである。「ドイツ人がタリンを征服すれば直ちに、私は釈放されるだろう。私と多くの人質とを交換するために、彼らは私の解放を要求するだろう」。実際には破竹の勢いのドイツ軍は、開戦2カ月後の8月28日にタリンに入城したが、パッツの釈放を求めることはなかった。また、どうして拘束前に亡命しなかったのかとの問いには、「もちろん、操縦士を雇って飛び立つことは容易だった。だが、もし私が国を離れたら、大量殺戮になるだろうと懸念したのだ」と答えている。さらに、ソ連邦との条約にエストニアが調印したのはなぜかとの質問に対して、「我々は最後通牒を受け取ったのだ。もし我々が受け入れなかったら、フィンランドと同じことが起こっただろう。当時のドイツは介入しなかったし、我々を支援しなかった。ドイツにはソ連邦が必要だったからだ。後にロシアが口実を設けてエストニアを占領したが、我々が想像するに、何か秘密の軍事条約があったのだろう。それは存在していないが。彼らが必要としているのはただ言い訳のみだ・・・エストニア新政府の選挙は秘密に包まれている」。

コンスタンティンの言葉がさらに続く。「エストニアは二頭のライオンに挟まれた子羊のようなものだ、とのアフガニスタン国王の発言は正しい。確かに、その頃のライオンの片方はまだイギリスだった。今や、ドイツが取って代わっている」。「自国の領土内に外国軍隊を認めるような国家は、もはや運命の主人ではない」。

パッツ一家の拘禁後、彼らの住んだアパートメントは当局によって徹底的に調べられたが、何ら目新しい証拠がなかったことが、バシキールのソコロフからモスクワのフェドートフへ報告された。一方、独房内の毆はヘルギにも及び、訓練を積んだNKVD諜報員をすぐに信頼してしまい、心を開いて話し始めた。ヘルギは「子供たちに会うことを認めてくれさえすれば、どんな条件にも要求にも喜んで同意します」と答えたが、彼女は政治的見解や情報に疎く、彼女からは何ら具体的情報は得られなかった。その彼女の最愛の子供たちマティとヘンは、ウファの孤児院に入れられたが激しく抵抗し、食事も拒否し、8月には二人とも病気になった。9月の新学期が始まると二人は引き離され、兄マティは学校に通い始めた。そして幼いヘンは、この孤児院で亡くなった。わずか6歳だった。

他の二人はどうなっただろうか。ヴィクトルは、独房内でもほとんど何も喋らなかったようである。家政婦オルガは、ブルジョワであったパッツ一家はともかく、なぜプロレタリアートである自分が入獄しなければならないのかさっぱり分からないと独房内で話して

いた。

コンスタンティンへの厳しい尋問は続いていた。彼が所持していた手紙から、戦間期エストニアのファシスト団体 VAPS¹⁶ とのつながりを示すものが発見された。取調官はこれを証拠に、パッツ大統領がナチス＝ドイツとファシストの協力者であると問い詰めたようである。彼は、自分がファシストの支持者だと見なされたことに非常な侮辱を感じたらしく、「独房仲間」つまり NKVD 課報員に、自分こそがファシストである VAPS を打ち砕いたのだと、詳細に語っている。彼は、VAPS の背後にはポリシェヴィキがおり、最後は赤軍を引き入れて権力を握るつもりだったと信じていた。記録から見る限り、彼は独房内でも落ち着いており、動揺した様子は見られない。一つには、かつて独立運動に関わって投獄された経験があるようで、コンスタンティンは何度かそれを語っている。エストニアに話が及ぶと、大地に根ざして生きるエストニア農民の頑強さを繰り返し、これに誇りを抱いていたようである。

1942 年初めになると、大統領に対する尋問姿勢が突然改善された。合衆国、イギリス政府の執り成しがあったことが窺える。「アメリカやイギリスでは、エストニア大使たちが声を上げている」「彼らはエストニア官吏の解放を要求している」と彼は独房で語っている。こうした中、バシキール人民委員ソコロフはパッツを自分の執務室に呼び、こう告げた。「全エストニア民族が、我々と共に、ヒトラー主義に対して勇敢に戦っている。コンスタンティン・ヤコブレヴィッチ、あなたは祖国にいるべきだ」。壁には大きな地図が掛かっており、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ドヴィナ川、ドニエプル川に沿って、つまり戦線に沿って小さな旗が表示されていた。こうした発言や演出は、彼に影響を与え、彼から証言を引き出すための巧妙な言葉遊びであったが、彼はそれに気づかなかった。「眩惑」されてしまったコンスタンティンは、独房に戻ってから一気に話し出した。

「人民委員は、エストニア民族を実在物として話した。1918 年のように、エストニア軍部隊が権力を奪取し、ドイツ人をエストニアから押し出すことも十分に可能だ。もしそうなれば、エストニアにソヴィエト軍は存在しないのだ。他方でエストニア人は、ソヴィエトの側に立ってヒトラーに対する戦いを始めはしないだろう。……だが、もしソヴィエト軍がエストニアにいるのなら、どうして戦線が国境線に沿っているのだろうか？ ソヴィエトがいれば、そうはならないはずだ。つまりこれは、ソヴィエトはエストニアにはおらず、我々の四個師団がエストニアで戦っているということだ……」。パッツの妄想は広がり、ソ連邦は友好的で独立したエストニアを必要とするはずだ、そのために自分は手書きの証言を書こう。「私の考えでは、我々は 2 月 24 日、エストニア国家独立記念日までには祖国に戻るだろう」。

しかし、パッツは知らなかった。既にドイツ軍は半年前にエストニアを占領していたことも、それどころか戦線はレニングラードとモスクワ近郊に達していたことも、またエストニアの四個師団など存在せず、ライドネルはペンザに入獄し、将軍全員と多くの将校は銃殺されたか収容所に追放されていたことを、そしてエストニア軍の残存部隊は極寒の中

で打ち倒されていたことを。

コンスタンティンの独房仲間（NKVD への通報者）は何人かいたが、最後の一人はユルチャクという名であった。彼もまた、独房内でのパッツの会話を逐一報告していた。パッツは、「ドイツ人は遅くとも9月までにはウファに進軍するだろう」と言い、ソヴィエト権力が復活することはないと確信していた。だが、ソヴィエトの死滅を常に予言していた言葉は、しまいには全く聞かれなくなった。彼は自分をブルジョワ民主主義者と考えていて、ファシズムと共産主義を似たような物と見なし、この二つの極端な主義は長くは続かないと見ていた。

1942年春になると、コンスタンティンに対する尋問もほとんど行われなくなった。3月20日付けでユルチャクがNKVDに送った報告書には、こんな言葉が記録されている。「バルトの政治家をモスクワに集合させ母国に送還する、との私の提案は実行されないだろう。もしスターリンにその気があるのなら、我が国の記念日である2月24日までに私を返していただろうから」。だが彼は、赤軍が攻撃を続けるなどとは信じていなかったようである。お互いに憎み合っている二つの体制間の戦争は、両指導者間の妥協で終わることはできない。ヒトラーが負けても、ドイツが勝っても、平和が到来することはない、と。

同じく、独房仲間からNKVDへ送られた報告書にも、パッツの思想が披瀝されている。「エストニア共和国の政策は、反ソ連邦だったのではない。ソ連邦に、ドイツに、あるいは別の国に、どのような体制が存在しようと、エストニアには構わなかった。・・・エストニアにおいて我々は、ファシストと共産主義者の両方の攻撃に反対して、立憲民主主義体制を擁護した」。「ソ連邦は最後通牒を我々に送りつけ、我が政府の不信用でもって正当化し、バルト諸国間で秘密裏に調印された条約のようなものまで持ち出した。この二つの非難は、全く根拠のないものだ。我が政府は、ソ連邦に逆らうような措置を取らなかったし、そのような条約など存在しない。・・・秘密条約など存在しないと言った我が国の大使に向かって、モロトフでさえこう語った、『恐らくそれは存在しない、しかし我々はそれを必要としている』。・・・エストニアは、世界政治の犠牲者となったのだ」。

パッツ父子に対する予備捜査の最終期限は何度も延長されたが、結局何ら充分な理由は見出せなかった。既にコンスタンティンへの尋問は30回、ヴィクトルへは14回を数えていた。1942年2月16日には、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国検察官ヴォリン（Volin）が、バシキール自治共和国の内務人民委員と検察官に脅迫的な手紙を送り、捜査と迅速に終結させるよう要求した。これに対してソコロフは3月5日付け返信で、パッツ父子への刑事事件を終了するのは不可能である、これはソ連邦内務人民委員代理コプロフの命令である、父子の自白が求められていると返答している。

8月28日、ソ連邦NKVD刑務所管理局長の命令により、前エストニア大統領はモスクワへ移されることとなった。9月14日、大統領父子はモスクワへと囚人移送された。この時、既にヴィクトルの妻ヘルギは収容所へ送られていた。特別法廷は彼女に、刑法違反の罪で服役5年を言い渡した。判決理由は刑法第7条第35項違反であったが、これは犯

罪的環境と関係したことは社会への危険を意味しているというもので、この「環境」とは夫と義理の父を指していた。ポールは、もう一人の女性オルガの運命についても調べたが、書類を見つけられなかったと述べている。またモスクワ時代のパッツ父子についても、具体的情報を得られなかったという。ただ、断片的にヴィクトルの様子を窺うことはできる。

1943 年 1 月 27 日、囚人ヴィクトルの手紙が、拘禁されていたキーロフ州 NKVD 刑務所部門から、モスクワのソ連邦 NKVD 第三部のジューコフ大尉に送られた¹⁷。この中には、囚人第 13 番（ヴィクトルのことである）が、自分の父、二人の女性、子供たちの行方を気にかけていたことが窺えるという。2 月 6 日にジューコフは、バシキリアの地元 NKVD に情報提供を求め、4 月 18 日には返答を受け取った。そこには、兄マティ 10 歳は健康で大変よく勉強しているが、弟ヘン 6 歳は数カ月前から肺炎にかかり衰弱しており、一定量以上の配給がなされていることが報告されていた。翌日ジューコフは、ヴィクトルの手紙をヘルギに渡すよう（ただしヴィクトルの居場所を特定できる箇所は省くこと）、そしてヘルギにヴィクトル宛の手紙を書くよう認めること、ヘルギの拘留状態の改善を希望する旨の機密文書に署名した。この文書は、ヘルギが拘留されていたスヴェルドロフスク州セヴララゲ NKVD の作戦部門長に宛てたものだった。だが、この配慮を求める文書がセヴララゲに届いた時、ヘルギはその収容所にはいなかった。

パッツ大統領は 1943 年 3 月 23 日、裁判所命令なしに、カザン市にあるソ連邦 NKVD の精神病院での強制治療を指定された。彼は「第 12 番」とされた。同年 9 月 23 日、ソ連邦 NKVD 第三部は、コンスタンティンとヴィクトルの捜査を特別命令が出るまで一時停止とした。「作戦上考慮して」というのが公式な理由だった。「作戦上の考慮」は長く続き、パッツを隔離して強制治療に当てるという決定が特別評議会でも下されたのは、9 年後の 1952 年 4 月 29 日のことであった。ポールの調査によれば、登録証以外、パッツに関するいかなる文書も、カザンの閉鎖精神病院には保存されていないという。登録証にはただ、いつ、どこから入院したか、目的地はどこか、いつ退院したかのみが記されていた。なぜ突然に刑事事件（一連の捜査のこと）が「作戦上の考慮」により最終的に中止されたのかについて、ポールは個人的意見として、ヴィクトルを NKVD と協力させる企てが始まったからではないか、と推測している。しかし、ヴィクトルと協力する合意は成功しなかった。ヴィクトル・パッツは 1952 年 3 月 4 日、プティルカ刑務所で死亡したからである。46 歳だった。

4. コンスタンティン・パッツの最後

1953 年 3 月のスターリン死後、いわゆる反革命罪を宣告された刑事犯を再調査する中央委員会が設置された。パッツは精神病院に監禁されていたが、彼の件も再審査された。1954 年 11 月 15 日、第 27 回目の最高委員会が招集され、以下のような決定がなされた。「コンスタンティン・パッツに関するソ連邦国家保安省特別評議会 1952 年 4 月 29 日の決

定を破棄する。ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国刑法典第11条に基づき、この刑事事件を終結させる。K. パッツを強制治療から解放する」。第11条とは、精神が正常な状態で行為に及んだが、刑の宣告時には精神障害となった人物には、社会防衛のための司法矯正手段は適用されないというものであった。1954年12月、医員に付き添われたパッツは、カザンの閉鎖病院から、エストニアのヴィリヤンディ近くのヤメヤラ精神神経病院へと移送された。

ヘルギ・パッツは1946年に釈放され、息子マティと共にエストニアへ帰還した。しかしヘンはその2年前に孤児院で亡くなっていたことを知る（マティの証言によれば、1944年2月初めに飢えで死亡した）。1950年7月17日、ヘルギは特別評議会から2度目の刑法違反で5年の懲役を宣告され、クスタナイ州へ送られた。1955年3月に彼女は無事にエストニアへ戻ったが、その時には「老人」はもうこの世にはいなかった¹⁸。

パッツがエストニアに滞在したのは一カ月未満だった。彼が帰還したとの知らせは、すぐに国内に広まり、ヴィリヤンディとヤメヤラに訪問者が次々とやってきた。これはエストニア・ソヴィエト社会主義共和国指導部にとって頭痛の種となり、パッツをエストニアから追放することが決定された。この、パッツの最後の旅について、ポールは興味深い逸話を紹介している。それは、パッツ追放作戦を命じられた人物が1980年3月31日に供述した内容である。多少長くなるが、紹介したい。

「1954年12月30日、当時若い運転手であった私は、エストニア国家保安大臣代理に呼び出された。彼は、車が良い状態であるかを訊ね、この先は長い運転になる、責任が要求される、と述べた。一人の病人をヤメヤラからブスコフまで移送し、そこで列車に乗り換えさせるといふ。全てが最高機密だった。大佐は私に日割りで50ルーブリくれ、我々の運転には他に二人が付き添うと言った。一人は私もよく知っていて、熟練したバンドローグ（bandologue: ポールによれば、戦後もエストニア国内で反ソのゲリラ活動が続いていた「森の兄弟たち」を追跡する人物を、この用語で呼んでいたという）だった。もう一人は私は知らなかったが、対外諜報員だったと思う。我々はタリンからヴィリヤンディまで、青いパベダを運転した。私は車のナンバープレートも思い出せる。99-00だった。ヤメヤラに着いた時、私は悟った。我々はエストニア大統領パッツを連れ去らなければならないのだと。彼は車に乗りたがらず、抵抗し、こんな夜中にどこへ連れて行くのだと尋ねた。腕力を用いて大統領を車の中に押し込め、すぐに出発した。旅行中、パッツは、自分はどこへ連れて行かれるのか知りたがった。12月31日朝6時、我々はブスコフに到着し、ホテルへ向かった。二部屋が我々のために予約されていた。私はその日の時刻をよく覚えているのは、我々は何も食べておらず、レストランが6時に開店したからだ。我々はウオッカを飲み、食べ、眠った。我々は交代で監禁者を見張った。列車に間に合わせるため、我々は一時間早く準備をしたが、それでも遅れそうだった。最初パッツは服を着たがらなかったで、我々が彼のパンツを着せた。車に入れる際には再び腕力が必要だった。自分はどこに連れて行かれるのか、彼はずっと尋ねていた。我々は時間に追われていたの

で、駅のプラットフォームにパバーダを直接乗り付けた。警察の笛が背後から聞こえた。我々は9号車の前で止まった。今度はパッツは車から降りようとはせず、座席と車のドアをしっかりと掴んで離さなかった。彼を乗せるのは急行列車で、プスコフ駅にはほんの数分しか停車しなかったので、我々は急がねばならなかった。我々がパッツと大騒ぎしているうちに、列車は動き出した。我々はパッツを動いている車両の中に押し込んだ。私は列車番号を思い出せないが、カーニン方面行きだった。車両には他の護衛がおり、我々は大統領を彼らに引き渡した。我々はホテルに戻り、別のグラスを空け、運転に戻る前に休息を取った。夜に我々は帰路についたが、静かな新年前夜だった。我々は年が明ける直前にタリンに到着した。我々の家族は、既にテーブルに座っていた」。

以上が、かつての運転手が語ったパッツの最後の日々である。ポールがこの運転手に、パッツは精神病だったのか尋ねたのに対して、彼は「普通の老人で、どこも悪いとは認められなかった」と答えている。パッツ大統領は人生最後の新年を外国で迎えた。彼はカーニン州のブラシェヴォ病院で亡くなった¹⁹。1956年1月18日、81歳の人生に幕が下りた。

時が流れたが、パッツは毎年2月24日のエストニア独立記念日の前になると、公式に思い出された。それはソヴィエト体制が、パッツの「外国に雇われた、反人民的な、ブルジョワの」本性を新聞紙上で議論することが、プロパガンダ的理由のために必要だと判断したからであった。

数年前（ポールがこの記事を発表した1992年から数年前を指す）、ヴァルドゥル・ティムスク（Valdur Timusk）大佐は、パッツの墓を見つけようと考え、自費でカーニンとブラシェヴォを訪れ始めた。数々の困難にも拘わらず、彼はブラシェヴォ共同墓地でパッツの遺骨を発見した。ウファで撮影されたパッツの囚人写真が残されていたため、専門家が鑑定したところ、間違いなく遺骨はコンスタンティン・パッツのものと断定された²⁰。

以上が、ウラジーミル・ポールによってまとめられた『コンスタンティン・パッツ―祖国を遠く離れた歲月』の内容の一部である。

おわりに

発見されたパッツの遺骨とその後を、最後に述べておきたい。彼の遺骨は1990年10月21日、タリン市西部近郊にある「森の共同墓地（Metsakalmistu）」に改めて埋葬された。死去から34年を経て、漸くパッツは祖国エストニアに安住の地を得たことになる。松林に囲まれた広大な墓地には、独立回復後初代の大統領レンナルト・メリを始め、多くの政治家や作家、市民が埋葬されている。墓地の中でも小高く整地された、ひと際開けた場所に、パッツ一族の墓所がある。コンスタンティンのすぐ横には若くして1910年に亡くなった妻ヘルマが、その反対側にはソヴィエト拘禁中に命を落とした息子ヴィクトルと孫ヘンが静かに眠っている²¹。筆者は本稿執筆前の2008年夏にこの墓地を訪れ、パッツの墓に献花した。

パッツの歴史的評価は難しい。理由の一つは、国内情勢と国際環境があったとはいえ、彼が1934年に民主主義体制を崩壊させて権威主義的独裁体制を打ち立てたこと、もう一つの最大の理由は、1939年9月の時点で、つまりソ連邦から国内の軍事基地提供を要求する最後通牒を突きつけられた時、なぜフィンランドのように武器を取って戦わなかったのか、ソ連邦に併合されることになる条約に調印してしまったのかという点である。特に第二点は、現在でも多くの歴史家が問い続けている問題である。『パッツ記録』の最後に収められている、大統領の孫のマティ・パッツに対しても、会見記者が同じ質問をしている。マティはこの点について、「自分の祖父を評価するには、自分は適切な人物ではないと思う」と答えているが、誰であっても容易に回答できるとは思えない。しかし、本稿に断片的に残されたパッツの肉声は、第二次世界大戦とバルト諸国併合の歴史を再考する上で、多くの示唆を与えるものと考え²²。



(写真)「コンスタンティン・パッツの墓」エストニア共和国、タリン (筆者撮影)

注

- 1 現在、エストニア大統領府ホームページ上では、パッツの公務について英語、ロシア語でも閲覧できるページがあるが、いわば公的な事実関係が述べられている。President of the Republic of Estonia, 'Heads of State, Konstantin Päts,' <https://www.president.ee/en/republic-of-estonia/heads-of-state/5109-konstantin-paets/layout-headofstate.html> (2020年10月27日閲覧)
- 2 エストニア語一次資料を用いたパッツの権威主義体制に関する研究としては、以下を参照。小森宏美 [1997] 「エストニアにおける権威主義体制 (1934-1940年)」『西洋史学』187号、149-165頁；小森宏美 [2001] 「両大戦間期エストニアの権威主義体制に関する研究動向」『東欧史研究』23号、63-72頁。
- 3 Vizulis, Izidors [1990] *The Molotov-Ribbentrop Pact of 1939: The Baltic Case*, New York: Praeger, pp. 152-153.
- 4 Estonian State Commission on Examination of the Policies of Repression [2005] *The White Book: Losses Inflicted on the Estonian Nation by Occupation Regimes, 1940-1991*, Republic of Estonia.

- 5 *The White Book*, p. 25, 37.
- 6 フーヴァー研究所公文書室の現地カタログによれば、エストニア関連コレクションが25、ラトヴィア関連コレクションが61、リトアニア関連コレクションが30、バルト諸国全般に関わるコレクションが14である。ただし一部は重複しているが、合計で100以上の個人・組織関連コレクションが所蔵されている。
- 7 Hoover Institution Archives Holdings on Estonia, Pats, Konstantin, 1874-1956. Miscellaneous papers, 1954-1992. 1 ms. Box, 1 envelope.
- 8 筆者はかつて拙著の中で、パッツ本人から聞き書きして残した口述回顧録が存在しフーヴァー研究所に保管されていると書いた（大中真 [2003] 『エストニア国家の形成』彩流社、220頁、註14）。しかし、2008年春に同研究所を再訪して調査した結果、これは本稿で紹介するボールによる記録だった事実が判明した。この場を借りて、訂正したい。
- 9 1939-1940年にかけてのバルト諸国独立喪失については、以下の拙稿を参照されたい。大中真 [2008] 「バルト諸国の消滅と復活」山内進編『フロンティアのヨーロッパ』国際書院、163-183頁。
- 10 タリン近郊にあるカドリオルク宮殿（Kadriorg Palace）は、1718年にロシア皇帝ピョートル1世により建てられ、エストニア独立後1920年代はエストニア美術館として公開された。1929年からエストニア共和国国家元首官邸となり、パッツは逮捕までここで執務していた。戦後、1946-1991年まで再び美術館となり、2000年にカドリオルク美術館として再び公開された。現在、同美術館3階の一室（第17室）は、かつての国家元首執務室（図書室）として再現されており、大きなパッツの写真が飾られている。
- 11 以後の『パッツ記録』に出てくる人名原語表記は全て、原文のママである。キリル文字のラテン文字への転写で一部、アメリカ議会図書館方式と異なる表記があることをあらかじめお断りしたい。
- 12 1918年2月から11月までエストニア全域を支配下に置いた、ドイツ帝国軍を指すと思われる。
- 13 1939年9月にソヴィエト側によって調印を強要された、エストニア・ソ連邦相互援助条約を指すと思われる。この条約により、エストニア領土内にソ連軍駐留が認められ、軍事基地が建設された。
- 14 1940年7月14-15日に行われたいわゆる「議会選挙」を指すと思われる。
- 15 例えば、戦間期リトアニア最後の外相ウルブシスによる回顧録、ユオザス・ウルブシス（村田陽一訳）[1991] 『回想録リトアニア：厳しい試練の歳月』新日本出版社、136-139頁前後を参照。ウルブシス一家も、リトアニア「議会選挙」後の1940年7月17日にソ連邦NKVDに拘束され、モスクワ南東部の町タンボフに「流刑」となった。ここでは監視、尋問があったものの、まだ比較的自由で、NKVDが一家の生活の面倒をみたようである。しかし、1941年6月22日に逮捕され、監獄に入れられ、以後13年間におよぶ拘禁生活を送った。つまり、本稿『パッツ記録』とウルブシスの回顧録を比較すれば、バルト諸国の主要な指導者は同じ時期、同じ手順により、同じ拘禁生活を送っていたことが分かる。
- 16 VAPS (Eesti Vabadussõjalaste Liit) とは、エストニア独立戦争（1918-1920）に従軍した退役軍人が1929年に創設した団体で、ラルカ將軍を指導者としていた。本稿でも、また多くの著作でもVAPSは「ファシスト団体」とされているが、最近の研究では、実際にはナチスのようなファシスト団体とは性質の異なるものだったと指摘されている。VAPSは議会制民主主義と政党を攻撃し、国民から直接選ばれる強力な大統領制を要求し、人々から広範な支持を集めた。しかし、これに危機感を抱いた当時のパッツ首相は、ライドネル將軍と共に1934年3月にクーデタを起こし、権威主義的独裁体制を打ち立てた。VAPSについては、以下の研究を参照。Kasekamp, Andres [2000] *The radical right in interwar Estonia*, New York: St. Martin's Press.
- 17 前傾ウルブシスの回顧録によれば、この時期、つまり1943年頃、キーロフの監獄にはバルト諸

国の政治指導者たちが集められていたようである。もちろんそれぞれの独房は離れていたが、パッツ父子の他にウルブシス夫妻、ライドネル夫妻、リトアニア首相メルキス夫妻、ラトヴィア国防相バロディス夫妻、ラトヴィア外相ムンテルス夫妻が収監されていたという。そしてある日、パッツの神経が参ってしまい、それきりどこかへ移送された、その後パッツ父子がどうなったかはいまだに(1988年執筆時点で)分からない、と書かれてある。ウルブシス『回想録リトアニア』152頁。なお、エストニア軍総司令官ライドネルは1953年3月14日、キーロフのウラジミール収容所で死亡した。

- 18 フーヴァー研究所公文書室のコンスタンティン・パッツ関連文書コレクションには、ヘルギ・パッツが自分たち一家の逮捕、拘禁を語ったオーラル・ヒストリーの記録も残されている。Hoover Institution Archives, Pats, Konstantin, 1874-1956. Miscellaneous papers, 1954-1992, 'The Oral History of the Arrest and Imprisonment of the Last Estonian President Konstantin Pats and His Family by His Daughter-in-Law Helgi-Alice Pats (1911-1988).'
- 19 この、パッツの人生最後の日々の医療記録が、フーヴァー研究所のパッツ・コレクションに収められている。ロシア語により書かれ、図表付きで詳細に記録されたもので、例えば定期的な体温測定表も確認できる。
- 20 フーヴァー研究所のパッツ・コレクションには、パッツの埋葬地が発見されたという『エースティ・エル』紙の記事と、彼の遺骨と生前写真との鑑定についての記事が収められている。
- 21 筆者は本稿の執筆に先立ち2008年8月、エストニアの首都タリン郊外の「森の共同墓地」を訪れ、コンスタンティン・パッツを墓参した。パッツ一族の墓所には8名が埋葬されていたが、全ての墓に新鮮な花が供えられてあったのが印象的だった。墓所特定について多大な協力をいただいた在タリン日本大使館に、感謝申し上げます。
- 22 本研究は、平成19年度および20年度科学研究費補助金(若手研究(B))課題番号18730121の助成を受けたものである。

【参考文献】

(未公開第一次資料)

スタンフォード大学フーヴァー研究所公文書室所蔵「コンスタンティン・パッツ文書」

Hoover Institution Archives Holdings on Estonia, Pats, Konstantin, 1874-1956. Miscellaneous papers, 1954-1992. 1 ms. Box, 1 envelope.

(第二次資料)

ユオザス・ウルブシス(村田陽一訳)[1991]『回想録リトアニア：厳しい試練の歳月』新日本出版社。

大中真[2008]「バルト諸国の消滅と復活」山内進編『フロンティアのヨーロッパ』国際書院。

小森宏美[1997]「エストニアにおける権威主義体制(1934-1940年)」『西洋史学』187号、149-165頁。

小森宏美[2001]「両大戦間期エストニアの権威主義体制に関する研究動向」『東欧史研究』23号、63-72頁。

Estonian State Commission on Examination of the Policies of Repression [2005] *The White Book: Losses Inflicted on the Estonian Nation by Occupation Regimes, 1940-1991*, Republic of Estonia.

Kasekamp, Andres [2000] *The radical right in interwar Estonia*, New York: St. Martin's Press.

Vizulis, Izidors [1990] *The Molotov-Ribbentrop Pact of 1939: The Baltic Case*, New York: Praeger.